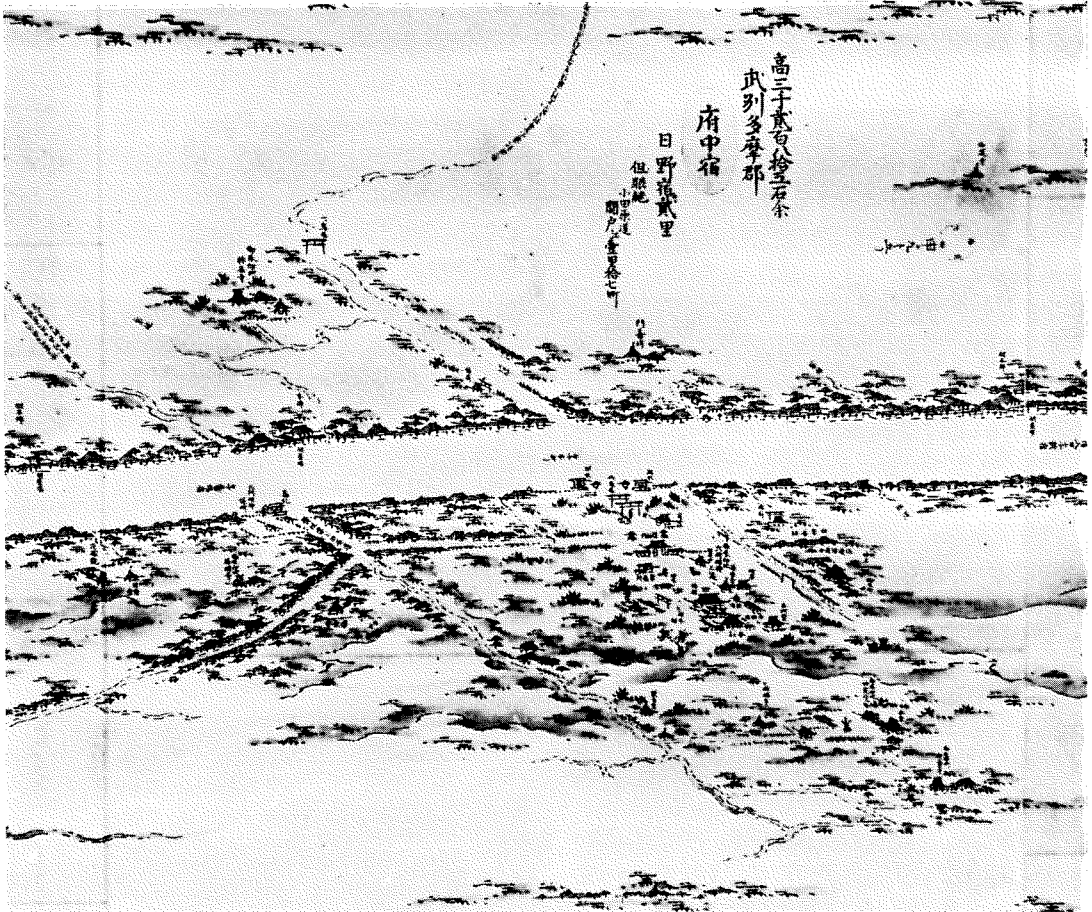


あるむせお

府中市郷土の森だより

No.9

al museo



ぶんけんのべえす
甲州道中分間延絵図

紙本着色 寛政12年(1800)~文化3年(1806)
宿場や街道の状況は、書類では各地に種々報告が残されています。しかし街道全体にわたる絵図は、数年をかけて道中奉行の下に作成された「五街道其外分間見取延絵図」が唯一のもので、これは五街道の他、脇往還も実測し、縮尺1800分の1で詳細に描いた91巻に及ぶ絵巻です。

うち甲州道中分は9巻を占め、府中宿の様子も一部現実と合わない点もありますが、周辺状況と合わせてその姿を知ることができます。

原本は東京国立博物館及び逓信総合博物館に所蔵されていますが、当館ではレプリカを作製し、史料として活用しています。

清水が丘遺跡の縄文土器

常設展示室の「土の中の文化」コーナーの壁面にずらりと並んだ大小さまざまな縄文土器。その雄大で力強い造形美は、時の流れを越えてなお、現代の私たちの心をときめかせてくれるものがあります。

これらの土器は、いずれも昭和56年から昭和58年にかけて行われた府中都市計画道路2・1・4号線予定地の発掘調査によって出土したものです。ここは、町名では清水が丘1丁目から若松町1丁目に含まれます。

縄文時代は今から約1万2～3千年前から約2千数百年前まで続いた大変長い時代でした。考古学の研究では、それを土器の変遷によって草創期・早期・前期・中期・後期・晩期の6期に区分していますが、2・1・4号線地区の調査では早期から後期にわたる長い期間の遺物・遺構が確認されました。中でも中期に属する遺構・遺物は豊富で、この時期には何軒かの住居が寄り集まった集落が形成されていたものと考えられています。展示では、その中期の土器と後期の土器のうち、出土後に接合、復原できた土器を時期別にグループ分けしてあります。

グループは中期前半、中期後半、中期末～後期初めの3つに分けてありますが、各時期の器形・文様の特徴を簡単に紹介しましょう。

中期前半の土器は勝坂式土器を中心としています。勝坂式土器は関東から甲信地方にかけて分布しますが、粘土の紐によって蛇身のような文様が多く施された豪華なその土器は、縄文土器の頂点ともいわれています。23号住居址出土の土器群は良好な資料で、深鉢形土器と浅鉢形土器があります。深鉢形土器の文様には、胴下半部だけに縄文を施し、胴上半部には太い粘土の紐で楕円形に区画した文様を付け、口縁部は無文のまま残すという特徴があります。なお中期前半のグループには、17号住居址出土の有孔鏝付土器や、30号住居址出土の人面装飾のあ

る深鉢形土器などの珍しい土器もあります。

中期後半の土器は加曾利E式土器が中心となっています。加曾利E式はおもに関東地方に分布します。このグループの中では、まず、19号住居址出土の土器群が注目されます。この住居址の資料は先に紹介した勝坂式から、次の加曾利E式へと移り変わっていく過渡期に位置付けられるもので、その深鉢形土器は勝坂式の伝統を根強く残したものと、加曾利E式の手法によるものに分けられます。加曾利E式の深鉢形土器の文様は、縄文が撚糸文を地文として、口縁部には粘土の紐で横向きにS字状の文様を施すという特徴があります。なお、18号住居址と20号住居址からは細い粘土紐を貼り付けて複雑な文様とした曾利式土器が多く出土しています。曾利式はおもに甲信地方に分布するので、これらの土器はその方面から持ち込まれたものかもしれせん。

中期末～後期初めの土器は、加曾利E式土器と称名寺式土器です。称名寺式はおもに関東地方に分布します。文様は縄文を磨り消して、それをJ字状に区画する特徴があります。

縄文土器は、単に美しいだけでなく、文字による記録がなかった時代の人々の行動や歴史を語る貴重な証人でもあるのです。(Ha)



19号住居址出土の土器

民具の活用

これまで博物館資料として民具が収集され、整理・保管され、調査研究されていくことを、具体例をあげて書いてみました。ここで最後になりましたが教育普及について、具体的には民具の活用についてご紹介したいと思います。

— 展 示 —

博物館は教育の場ですから、調査研究し学問的裏付けのある資料を展示しています。そして博物館で展示された「もの」を見て学ぶことに、博物館の大きな特色があるのです。ですから、「もの」を見て感動すること、そのことを第一に大切にしたいと思います。そこで郷土の森博物館の常設展示では、できるだけ実物による表現を心掛け、解説は補助的なものにとどめ、直接実物と対話できる展示方法を考えています。展示解説の主役は実物ですが、それだけでは情報不足になる場合には、簡単な説明や、展示解説シートで補足することになっているのです。



常設展の民俗コーナーでは、親子づれやおじいちゃんが孫を連れてといった光景をよくみかけます。「この道具はなあー、こうやって使うんだよ」「おじいちゃんの若かった頃は、このあたりはずっと田んぼでなあー」「おじいちゃんがよくこの道具使ってたっけなあー」こんな会話をよく耳にします。民具をとおして、こういった親と子、祖父と孫との会話が生まれる、すば

らしいことではありませんか。まさに「もの」を展示することによって、ふれあいの場を提供する博物館の存在が、大きくクローズアップされるところです。

— 体験学習 —

民具は身近にある生活用具です。展示されている民具からうける感動もありますが、実際に触れて使ってみると、より一層の感動が生まれることでしょう。実際に触れて使ってみる場、それが体験学習です。

郷土の森に来て、園内を散策していくと、ハケ下に茅葺きの越智家住宅があります。そしてその前に田んぼが広がっています。今稲がすすく育っていますが、これは春の田起し、夏の田植え、田の草とりと、みんな“こめつこクラブ”26人の子どもたちでやっている田んぼです。子どもたちは、秋になればノコギリ鎌で稲刈をそして千歯抜きで脱穀をします。昨年は抜き棒、千歯抜き、足踏み回転脱穀機そしてハーベスタを使って、それぞれ脱穀してみました。民具を通して脱穀農具の変遷やそれぞれの登場背景が理解でき、しかも田んぼで体験できるということは、2倍にも3倍にも理解が深まるようになることでしょう。そして年末には郷土の森の復原農家のヘツツイで火をおこし、ニワで餅つきをしてほおばります。米づくりという一年間の体験を通し、子どもたちは何を感じ、何を考えるのが、それはひとりひとり異なるでしょうが、きっとこの体験が一生の思い出となると同時に、何かの役に立つ、そして将来博物館の良き理解者となってくれるものと信じて、私たち学芸員も子どもたちと一緒に汗を流しているのです。

さて5回にわたって、できるだけ具体例をあげながら民俗、民具のことをお届けしました。少しでもお役に立てれば幸いです。(G)

現代プラネタリウムの歴史

加藤 勇二

プラネタリウムという言葉聞いて、大半の人は、「星空や星座を見せるドーム状の部屋」を連想されると思いますが、定義としては、半球状のドーム内に太陽、月、惑星、恒星、その他様々な天体の見かけの運行を投影する機械、システムを総称してプラネタリウムと呼びます。また、これは各種の付属投影装置を併用して、ほとんどあらゆる天文現象を短時間で再現できることから天象儀と訳されることもあります。

しかし、かつては地動説に基づいて、太陽を中心に各惑星(Planet)が公転する様子を再現する太陽系模型を意味していました。

1

今日でいうプラネタリウムの前身として、天球儀に似た形のものがあります。その一つには17世紀中頃にホルシュタイン公領(現在の西ドイツ北方)に住んでいたフレデリック三世という人が作らせたものがあり、天体の運行を見せる地球天球儀と呼ばれています。これは、直径3.35mの球体の外面には世界地図が、内面には星と星座絵が描かれており、水力を利用して太陽、月の運動をあらゆる仕掛けが付いていました。その中に12人の人が入り、球内面に描かれた星空や太陽や月の動きなどを眺めることができました。1713年レニングラードに同様のものが設置されましたが1747年に焼失し、後に複製されて、1901年まで使われました。これは現在、ロモノソフ博物館に展示されています。

この後、1682年にはクリスチャン・ホイヘンス、1700年にはジョージ・グラハムというように、次々と同様の機器が作られました。グラハムは地球の公転、自転及び月の公転の周期の比が正確でなかった従来の機器の欠点を克服し、ほぼ実際に近い周期比で回転するものをいくつも作り、その内の2基が現在残っています。

これらは、初めは王侯貴族や一部の金持ちのために作られていましたが、しだいにその教育的価値が認められ、18~19世紀になるとかなり

一般に普及しました。1758年、イギリスのケンブリッジ大学教授ロジャー・ロングが直径5.49mの大型天球儀を考案しました。これは、穴をあけた星空に外部から光をあて、球の中に入った約30人が同時に星空を見ることができ、また手動で天球をまわすことによって日周運動を再現することができました。“ウラニウム”と命名されたこの大型天球儀は120年間も使用されました。1911年、シカゴのクラーク大学学長オーレス・アトウッド博士がロジャーのものに似せて作った直径4.57mの天球では、内部の操作台から電動装置で太陽や月の運動、月の満ち欠けの様子を表せるようになりました。これはシカゴ科学アカデミーに寄贈され、現在も使われています。このアトウッドの天体運行装置がドイツのツァイス式プラネタリウム、ひいては現在世界各地にあるプラネタリウムの原形となったのです。

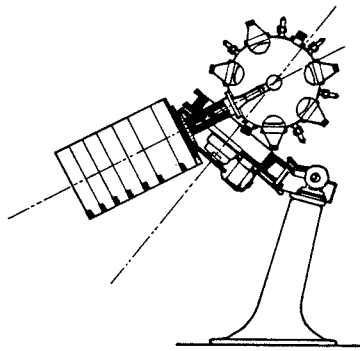
この他、1713年、ジョン・ローリーが作った太陽系運行儀などのオーラリーも広い意味ではプラネタリウムの前身と考えられます。

2

今日、私達が目にするプラネタリウムの1号機は1923年夏にドイツで作られました。第一次世界大戦後、敗戦国ドイツでは「国家の復興は科学の復興から」をモットーに、大戦前から建設中だったミュンヘンのドイツ博物館でも、あらゆる科学部門で動く実物大模型を展示することを目指しました。しかし、天文学の分野で実物模型を作ることは不可能でした。が、館長オスカー・フォン・ミュラー博士にその設計を依頼されたハイデルベルク天文台台長マックス・ウォルフ博士は、この問題点をみごとに解消して優れた設計図を作り、その製作をカール・ツァイス光学会社に依頼しました。そして同社技師長ヴァルター・バウアスフェルド博士によって現代式プラネタリウムの第1号機が完成しました。この時、作られた2台のプラネタリ

ウムのうち1台は同社工場の屋上の直径16mのドーム内に、もう1台はドイツ博物館に設置されました。しかし、この時のプラネタリアウムは、緯度の変換が自由にできなかったため北半球の、しかもドイツの星空だけが投影できませんでした。その後ドイツ博物館に収められたものは、同社の天文学部長フィリガー博士によって緯度の回転軸が新たに追加され、世界中の星空を投影できるように改良されました。

こうして、ドーム内に世界中の星空を表現できる投影機を備えた現代的プラネタリアウムが誕生し、1926年以降1939年まで大型機が27台、小型機が6台製作されました。



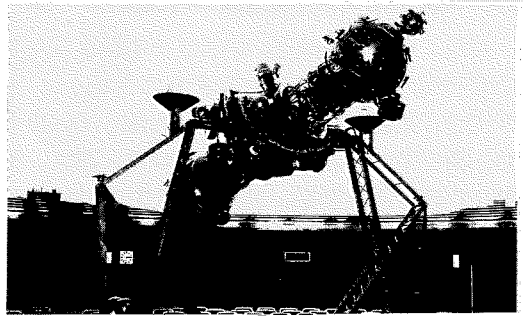
ツァイス社製 第1号機

3

日本では1937年3月、大阪市の電気科学館に初めてプラネタリアウムができました。投影機はカール・ツァイス社製の第25号機が設置され、1989年5月31日の閉館まで52年間に11,051,611人を星の世界へ案内しました。この他戦前には東京の毎日新聞社がカール・ツァイス社の製品を輸入し、1938年11月に有楽町駅前の東日会館の屋上に設置したものもありますが、惜しくも戦中、アメリカ軍の爆撃によって焼失してしまいました。その後しばらくの間、日本では大阪にしかプラネタリアウムはありませんでした。

東京渋谷の東急文化会館に五島プラネタリアウムが作られたのは1956年のことです。同館の機械もツァイス社製でドーム直径が20mもあり、世界でも最大級のものでした。続いて1960年には兵庫県明石市の市立天文科学館に、1962年に

は名古屋市の名古屋科学館に設置されました。



日本初のプラネタリアウム

(「大阪市立電気科学館50年のあゆみ」より)

4

現在、国内には250か所以上のプラネタリアウム館があります。このように数が著しく増えた理由には、プラネタリアウムの国産化に成功し、機械の管理運営が容易になったこと、その教育的効果が認められたこと等があげられます。プラネタリアウムの国産第1号機は1959年11月、浅草の“浅草新世界”に設置された五藤光学研究所の製品で、この後、大阪の千代田光器(現ミノルタ)、豊橋の金子天文研究所、蒲郡の興和光器等の会社が製造し、今日に至っています。

プラネタリアウムは、ほとんどあらゆる天文現象をわずかな時間で再現することができます。この特徴を有効に使えば当然教育的効果は高くなります。また、最近では、当館でも採用していますが、コンピューターによる自動演出の方式が開発され、従来のプラネタリアウムとは異なる形態のものが多くなってきました。

このような現状の中で、各館の今後の課題としては、いかにして独自性を表現していくか、ということがあげられます。機械などのハードに関することは、充実してきましたが、今後は内容等のソフトに関して、十分な研究をしていかなければならないと思います。

*参考文献

宮地政司「天文台と観測器械」(新天文学講座11)恒星社

高城武夫「天文教具」(天文ライブラリー3)恒星社

1974年版全国プラネタリアウム連絡協議会報

「大阪市立電気科学館50年のあゆみ」大阪市立電気科学館

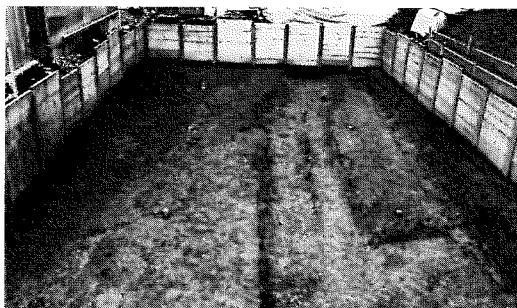
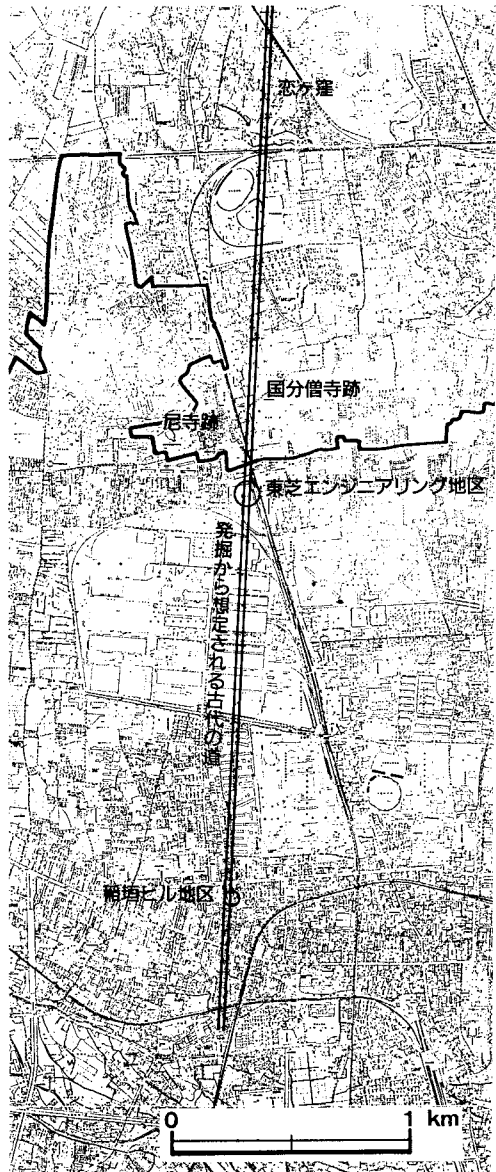
＝最近の発掘調査から＝

現在、東京～奈良といいますが東海道を歩くのが当り前のように思われますが、宝亀2年(771)までは、武蔵国は東山道ルートに属していました。東山道は、岐阜から長野・群馬・栃木・福島へと延びる道筋で、武蔵国は上野国から分かれる支道沿いにあったわけです。この上野国から武蔵国府に到る南北道路に当たるものとして、以前から武蔵国分寺と国分尼寺の間で見つがっている道路址が可能性の高いものと考えていました。今回改めてこの延長線上の、美好町児童プールのすぐ北側(写真下)と、国分寺市の恋ヶ窪付近(国分寺市教育委員会の調査)で道路址が検出され、地図に描いたように、一直線に約3.5kmにわたって延びることが確認され、より可能性が高くなってきました。

この道路址は、国分寺に近い東芝エンジニアリング地区内でその全貌が明らかとなっていて(写真右上)、ここでは両側に1m弱の側溝を持ち、側溝間での道路幅は12m(当時風に呼ばば40尺)を計ります。これは平城京の小路と同じ規模をもつもので、現在の道路と比較するならば国道20号線の車道幅と同じと言えば分かりやすいでしょう。美好町で見つがったものは、この側溝の片側と堅く踏みしめられた路面が検出されたのですが、測量によるとほとんど誤差なく一直線に延びていることから、当時非常に計画的に造られたようです。

彼方まで一直線に延びる幅12mもの道路に、当時どのような往来があつたかを考えますと、興味はつきません。

(美好町稲垣ビル地区の調査から 荒井)



カメラアングル

— 事業日誌抄 —

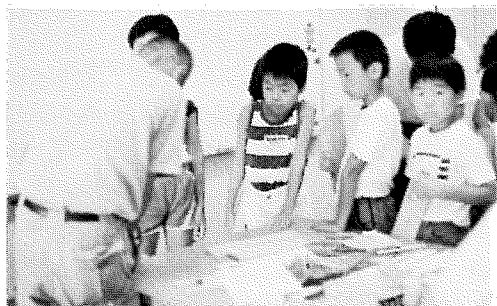
宇宙開発展 7/9～9/3

—日本のスペースシャトル—

ロケット、人工衛星、と日本の宇宙開発の跡をたどった企画展、大空への夢を拡げることができたでしょうか。



8/8～8/24 ▲ 縄文土器を作ろう
縄文土器って本当に使えるのね



できた!!

夏から初秋にかけて、郷土の森の体験学習では子供たちとこんなものを作りました。

▼ 9/16 こめっこクラブのかかし作り
今年も豊作まちがいなし



◀ 8/22 おもちゃを作ろう
竹とんぼ 竹ぶえ ふうね……苦勞と工夫で遊びにたどりつきました。

あれこれ

星空散歩—ペルセウス座のはなし—

どこの国の神話でも必ず英雄神話というもの
が存在します。なかでも、ギリシャ神話にはた
くさんの英雄が登場します。そのうちで星座に
なった者には夏のヘルフレス座、秋のペルセウ
ス座、冬のオリオン座などがあります。今回は
この中からペルセウス座の話をご紹介します。

ギリシャ神話に出てくるペルセウスの物語で
一番有名なのは、エチオピアの王女アンドロメ
ダを救出する話です。これは、彼が怪物メドウ
ーサを退治した帰り道、エチオピアの海岸で化
け鯨のいけにえにされそうなところを救けた王
女と結婚し、幸せになるという話です。秋の夜
空、アンドロメダ座の東側にペルセウス座がよ
りそ様な姿を眺めて、古代ギリシャの人々は
英雄の姿を想像したのでしょうか。

ところで、皆さんは、何を見て英雄を思い浮
かべますか？そして、皆さんにとっての英雄は
何処にいるのでしょうか？(K)



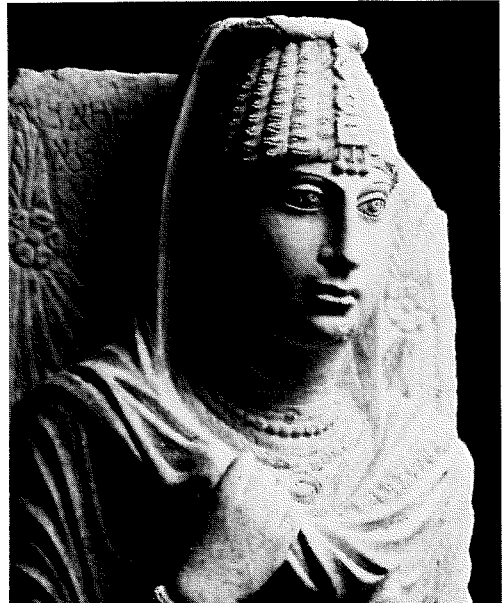
海のシルクロード

「古代シリア文明展」

11月12日～12月17日

市制35周年、郷土の森博物館開設3周年を記
念して、「古代シリア文明展」を開催します。

下の「婦人胸像」は、近年、隊商都市パルミ



ラの墓室から出土したもので、西アジアの伝統
とヘレニズム・ローマの伝統が混在する独特の
作品といえます。所々に朱が残ることから、当
初は華麗な彩色が施されていたことがうかがえ、
シリアの考古学者たちから“パルミラのヴィー
ナス”と呼ばれています。

ヘレニズム・ローマ時代、西のローマ帝国と
東のパルティア帝国に挟まれたシリアの地には、
双方の商人が取引きをする隊商都市が発達しま
した。こうした、隊商都市の出土品の中には、
“パルミラのヴィーナス”のように東西交易を
物語る文物も数多くあり、展示会のみどころの
一つといえます。

あるむぜお 第9号
al museo イタリア語
“博物館で”“博物館にて”の意
発行年月日 平成元年10月15日
発行 府中市郷土の森
〒183 東京都府中市南町6-32
☎0423-68-7921